

メキシコ湾原油流出事故の調査研究を！

All at sea

2010年5月27日号 Vol. 465 (397-398)

メキシコ湾原油流出事故では、米国政府機関による重要データ収集の動きが遅きに失している。

ひとたび災害が発生すれば、政府にせよ個人にせよ、被害の拡大防止と被災者の救援が最優先事項となる。しかし、もう1つ重要なのは、災害記録を残すためのデータ収集を迅速かつ協調的に進めることだ。災害の全容を正確に把握することは、復旧事業の計画、今後の災害における被害の最小化、そして必要に応じた関係者の責任追及に役立つからだ。

今も続くメキシコ湾での原油流出事故の場合、研究者は、十分なデータ収集の望みを阻まれ、既に実施された対策についても、十分な情報を与えられていないと感じている。

こうしたデータ収集の手はずを整える仕組みは、理論上は存在している。米国の緊急時指令システム (ICS) は、危機発生時に、連邦政府各機関と第一応答者の間の連絡調整を担うことになっており、「短命なデータ」や「壊れやすいデータ」を収集する権限を有している。これは、米国立海洋大気局 (NOAA) の復旧対策室 (OR&R) や環境保護庁 (EPA) の業務の一部でもある。

これに加えて、災害の影響に関する研究計画を立てた大学研究者は、米国立科学財団 (NSF) に対して最大20万ドル (約1800万円) の緊急資金を申請できる。ちなみに、この研究助成プログラムには「RAPID」というぴったりの名前が付いている。申請過程は簡単で、研究提案書は2ページ程度の長さでよく、交付決定は迅速に行われる。2010年2月のチリ地震の際には、地震発生からわずか5日以内に最初の3件のRAPID助成金の交付が決まった。また、NSFは、NOAA、EPAなどの政府機関とも連携

して、活動が重複しないよう調整する。そして、共同作業の円滑な遂行を期待できる研究グループどうしの共同研究をアレンジし、海洋災害の場合には船舶の利用時間を確保する。

しかし今回のメキシコ湾では、こうした調整の仕組みが十分には働いていないように思われる (*Nature* 2010年5月27日号404ページ参照)。例えば、流出原油の化学組成に関する基本情報が研究者に伝わるまで、かなり時間がかかった。また、当初、原油流出は早期に封じ込められるとの期待があったため、NSFによる最初のRAPID助成金の交付は、危機の勃発から1か月も経った5月下旬になってしまった。さらにNOAAは、その原油流出の追跡調査能力に対して、一般市民から懸念の声が出ていたにもかかわらず、それへの対応が遅れた。

特に、今回の流出事故の「実際の規模」は極めて重要な情報であり、激しい論争の的となっているが、事故の規模を評価するタスクフォースの結成をNOAAが発表したのは、5月20日になってからだった。この評価方法については、数多くの提案がなされている (その一例は*Nature* 2010年5月27日号421ページ参照)。

災害は、その性質上、必ず組織の崩壊や混乱を引き起こす。そのため、「完璧な対応」を期待するのは現実的でない。今回のメキシコ湾での原油流出は、特に難しい面がある。突如、明確な被害を引き起こす地震やハリケーンなどの災害とは異なり、原油流出は、徐々に展開する。流出の程度と必要な対策の規模が判明するまでに何日もかかるのだ。

こうした事情があるとはいえ、米国

の対応には改善の余地があった。例えばOR&Rは、原油流出が起こるたびに、運営資金の増減を繰り返してきた。1989年にアラスカ州プリンスウィリアム湾で発生したエクソン・バルディーズ号原油流出事故の記憶が薄れていくと、職員数は約3分の2に減らされ、残った職員の仕事量は増えた。

これに対する解決法の1つは、連邦政府の石油流出責任信託基金からの資金で年間予算を増額し、組織を再建して適正な職員規模を確保することだ。石油流出責任信託基金の大部分は、石油業界から徴収した税金によるもので、石油関連の緊急時における政府の対策費用を賄うのが目的となっている。これによって、最良の対策を明らかにするための基礎研究や、継続的な監視活動も可能になる。

もう1つ有用な活動は、災害に関する政府機関横断的なデータ共有制度を構築することであろう。その結果として、情報がオープンになって、一般市民が知り得ようになり、データに格差があることも明白になるだろう。

一方で、海底油田を所有するエネルギー会社のBP社は、5月24日に自ら積極的な行動を起こし、原油流出の長期的環境影響を独自に研究する活動に対し、今後10年間に5億ドル (約450億円) を提供すると発表した。

火山噴火、ハリケーン、地震、原油流出などの災害が起こると、環境は極限状態に追いやられ、それまでの科学知識の限界が明らかになることがある。せっかくの科学研究の機会を逃してはならない。

(翻訳：菊川要)